

# 絶望を嗤え（完結）

初代小人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「どうして私ばかりこんな目に？」

「俺がバカだったばかりに……」

「俺が悪いのか？なあ、答えろよ！」

ただ不運だった。ただ恵まれなかった。

持たざる者の逆境を乗り越え、幸せを目指すお話

後ろ向きな思考回路、鬱展開、自殺願望、人間不信などが盛り沢山なのでお嫌いな方はブラウザバックをお勧めします。

後半は比較的普通な恋愛ものとなっております。

# 目次

彼女の絶望	1	悲愴と、苦悶と、煩悶と	45
努力と初恋と悲劇	7	そして、裏切り	51
憤怒と、無力と、償いと	13	誰もが悪く、醜く、そして哀れな話	
彼と彼女のその後の日常	18	55	
彼の2度目の恋事情	23	喪失と、獲得と、幸福な最期	59
薄紅色の：	28		
ノーマルバッドエンド			
その終末は偶然か必然か	34		
デッドエンド			
彼女の悲劇的な最期	39		
彼女が再び希望を抱くまで			

## 彼女の絶望

死んでやる。

ずっと前からそう思っていた。

崖の前に立った私は、清々しい気分で、人生最後の1歩を踏み出した。

小学生の時、唯一無二の親友だと思ってた子が私の陰口を叩いていた。

彼女にとっては、特に意識した言葉ではなかったのだろう。

しかしこの言葉は私の心に大きな傷をつけた。

私は運動神経も良くなって、頭もそんなに良くなって。

小学校を卒業する頃にはこの世の中には平等なんてものはないなんて悟ったような考え方をしていた。

「不公平だわ」などと嘯うそぶいて、引け目を誤魔化ごまかしていた。

そんな私も中学生になって初恋をする。

あまり詳しく覚えていないがきっかけは些細なものだっただろう。

足が速い、とか、外見がいいだとか。

そんなことだったろうか。

奥手な私はいつも遠くから彼を見るだけだった。

それだけで満足してたのに：

「なあ、アイツって暗くて何考えてるかわかんねえよな」

「ほんと、最近よくお前のこと見てるぜ？大丈夫かよ」

「マジかよ…俺〇×ちゃんが好きなのによ」

死にたくなった。

彼が好きなのは中学で仲良くなった友達だった。

私は耐えられなくなつて。

そんな不条理を嗤い、道化を装った。

誰も信じられなくなつて。

高校は遠くに住んでる祖父と祖母の家の近くの知り合いが誰もいない学校に進学し

た。

入った高校でも親しく話してくる友達は出来て。

みんな笑ってる中で、私一人だけ嗤っていた。

友人と話している時もその友人のことを信用出来なくて、腹の底では相手のことを疑っていた。

学校行事の時も、授業中も、休み時間も。

私は嗤った顔の仮面をつけていた。

やがて、仮面を取ることが出来なくなつて。

家族という時も凝り固まった笑顔が外れなくなつた。

そんな私はまさしく道化だった。

でもその様子を家族に気づかれたいわけもなくて。

祖父と祖母は心配して何度も声をかけてきた。

でも私は…

家族も信用出来なかつた。

高校でそこそこ真面目にして、そこそこの大学に行つて。大学も道化を演じながら卒業して。

そこそこの会社に就職して一人暮らしになつて。信用出来ない家族とすら分かれて暮らして。

会社でも同僚にあまり踏み込まず、踏み込ませずに日々を過ごして。そんな中だつた。

彼女は所謂お局おぼねと言われる存在だつたのだろう。私の何が彼女の琴線に触れたのかは分からない。

ある日私は彼女に目をつけられた。

それから毎日チクチクと嫌味を言われる日々が始まつた。

親しげに話しかけてきた同僚も、慕つてる風な言動だった後輩達も、頼りにしているぞ、と私に言った上司も。

誰も助けてはくれなかった。

それどころかお局に加担するものまでいた。

とどのつまり私はどこまで行っても一人だった。

帰つても、会社においても。

私の心に寂寥感の穴が空いた。

最初は小さかったその穴は、お局にいびられる度、同僚や部下達の憐れむような目を見る度、心の穴は大きくなっていった。

やがて私は寂しさに覆われていった。

ついに私は“嗤う”ことも出来ないほど、この世に絶望した。

そして、私は自殺を決意した。

だというのに。

手を掴まれる。

なんで？

「どっぴりっぴりっしょ」

どうして？

「ふう、間に合ってよかったぜ、無事…か？」

どうしてこういう時だけ助けてくれるのよ!?

## 努力と初恋と悲劇

ふと車を運転しながら外を見ると、女性が崖に向かって歩いていった。  
自殺志願者だ。俺はそう思った。

そして、今度こそ助けなければと思った。

辛うじて道が舗装されている程度の山奥には警察など滅多にこない。  
アクセルを踏み込んで、女性の方へと車を走らせる。

法定速度なんざ気にして余裕はない。

車を降りて走り出すと、いよいよ足を踏み出すところだった。

慌てて走り、手を掴む。

目を閉じていた彼女は手を掴まれたことに驚愕の表情を浮かべた。

そして、引き上げられて、次に浮かべた表情は憤怒、であった。

「やっと死ぬると思ったのに！なんで助けたのよ!？」

彼女の叫び。

その叫びは悲痛なものであった。

「なら冥土の手土産に俺の話でも聞いてくれや。」

気がついたら話し始めていた。

###

まず最初に言おう。

俺は馬鹿だ。

頭の回転も鈍いし、人の心も理解できない。

物心ついた頃から父親は酒に溺れてた。

母親は遊び歩いて家にいる時間より外にいる時間の方が長かった。

叔父さんと叔母さんが面倒見てくれたおかげで助かったけど、そうでなかったら俺は多分あの家で野垂れ死んでたと思う。

そんな俺も小学生になった。

叔父さんと叔母さんは入学を自分の実の息子であるかのように喜んでくれたよ。

叔父さんと叔母さんはどちらかに問題があるのか、子供に恵まれなかったらしい。

だから俺を引き取って、実の息子みたいに大事に育ててくれた。

二人にはすげえ感謝してるぜ。

でも小学校入って勉強が始まるだろ？

俺、足し算もろくに出来なかったんだよ。

もちろん引き算も、掛け算もダメ。

あ、いや、今は出来るぜ？うん。できる。大丈夫。

んで、だ。俺はみんなが出来てる算数とか、国語とかを分かるようになってきたかったんだよ。

だから俺は必死で勉強したんだ。  
そしたらまあ点数は上がったよ。

平均点まではな

血反吐を吐く思いで勉強して、やっとの思いで平均点。

六歳だった俺は思った。

ああ、努力って報われないんだなって。

それでも勉強しないと平均点も取れないからさ、頑張ったわけよ。  
焦りも隠して。

ほら、俺の右手見てみるよ。

これ、ペンで出来たタコなんだぜ？

今大学生なんだけどな？ 1日復習やらなかっただけで次のテストの点数がガクンとさがるんだ。

小学校を勉強漬けで終わって、中学入ってさ。

いよいよ数学と理科がわかんなくなつた。

そうやって焦つてゐる時期にさ、優しく話しかけてくれた女の子がいたんだ。

俺が分からないところを聞いたらいつまでも嫌な顔一つせずにおしえてくれてさ、笑顔が可愛くてさ。

あつという間にその子のことが大好きになつて。

そしたらバレンタインの時にさ、靴箱に手紙が入つてたんだよ。

「放課後、屋上に来て欲しい」って。

見覚えのある字だった。

あの子の字だったんだ。

俺は喜び勇んで屋上に行ったよ。

そしたらさ、その子が屋上の柵に腰掛けながら「ずっと好きだった。でも、ごめん。ありがとう、さよなら」って言って落ちてつたんだ。

俺は：足が動かなくて：助けられなかつた！

情けなくて仕方なかつた。

あとから聞いた話じゃ、俺はバカだから周りから奇異の目で見られてて、そんな俺と

仲良くしてくれてたその子はさ。

酷いイジメを受けてたんだ

## 憤怒と、無力と、償いと

俺はさ、バカだったんだよ。

別に勉強なんざできなくてもいい。

ただよお。

好きな女の子一人守れないなんて、男として失格だ！

隣のクラスの子のその子の友達の女の子に言われたよ。

「お前は どうしてあの子がいじめられてることに気づかなかったんだ」って。

でも怒ってるその顔はさ、だんだん崩れていって。

最後には泣き顔に変わった。

号泣していた。

釣られて俺も泣いちゃった。

次の日、俺は人生初の喧嘩をした。

ガタイはよかったからよ、相手をぼこぼこにした。

先生に止められた。

先生も殴った。

その内何も分からなくなって、目の前にあるものを手当り次第に殴っていった。

気がついたらそこはポロポロの教室だった。

壁は穴だらけだったし、机やら椅子やらは散乱してて、目の前には血塗れの教師数人とクラスメイトが倒れてた。

ドアからは怯えた目で女の先生数人が見てた。ふと自分の手を見たら：

真っ赤だった

すぐに叔父さんと叔母さんが呼び出されて担任と話し合いになった。

担任は俺が朝来て突然暴れ始めたと言った。

叔父さんと叔母さんはそれでも俺を信じてくれて、「そんなはずはない。この子はそんなことをする子じゃない」って言ってくれたけどさ。

もう何もかもバカバカしくなって。

もういいよ、俺が悪いんだって叔父さんと叔母さんに言った。

それから帰り道さ、叔父さんは何も言わなくて、叔母さんはやけに明るく話しかけてくるんだ。その明るさが俺には辛くて。

俺は鍵をして部屋に閉じこもった。

叔父さんと叔母さんは何回か話を聞かせてほしいって言ってきたけどその後はそつとしてくれた。

真つ暗な部屋の中で俺、思ってたんだ。

いくらクラスメイトを殴ってもあの子は戻ってこないんだなって。

そしたら自分の無力さに腹が立って、涙がこぼれてきて。

死のうかとも思った。

でもさ、今死んでもその子は生き返らないし喜ばねえだろ？

あの世に行つてまで嫌われたくねえしよ？

だから決めたんだ。

あの子を助けられなかった分、あの子が助けるはずだった分、俺が助けるんだって。

別に初対面だろーが関係ねえよ。

目の前でまた人を死なせるわけには行かねえんだ。  
それが…俺のモットーで、あの子に出来る唯一の償いだと思うから。

あんたに何があつたか知らねえけどよ？

俺に見つかったのが運の尽きだと思え？

死にたくなるまで面倒見てやるんだからな！

###

彼の目には涙が滲んでいた。

ああ彼は立派なんだろう。

努力家で、優しくて。

そして何よりも10年以上たったその人のことを未だに愛してるんだろうなって。  
そして私は気づいた。

知つたふうな口を聞く彼にちよつぱり腹が立つて、少しだけ惹かれていることに。

私の頬を涙が伝った。

## 彼と彼女のその後の日常

それから彼はずっと私につきまといつてきた。

朝起きたらドアの前にいた時は流石に警察を呼ぼうかと思つたわ…

p r r r r r r r r r r r r r r r r

ほら、電話かかってきた。もうここまで来たら気持ち悪いんだけど？  
なんで私こんなのにときめいたんだろ。

「ねえねえ、生きてる？」

生きてるわよ！人を勝手に殺すんじゃないわよ！

「なら良かった。」

何ひとり勝手に安心してるとのよ。

なんかもうこの男と話したらいちいち腹立つわね！

「なあ、今暇か？美味しいフレンチのお店知ってるんだが行かぬ??」

ああもう！それは口説いてるのかしら!?

「くどつ…!? そんな事ねーよ！ ホントだぞ！」

分かったわよ！ 行けばいいんでしょ!? 変なことしたらぶん殴るからね！

そう言って電話を切る。

アイツの悲しそうなバカみたいな顔を想像したら罪悪感に駆られて断れない…

それからの数時間、そわそわなんてしてない。全然してない。落ち着いてたもん

「あ、いたいた。待たせちったか？」

「これ普通逆じゃない!? 私がちよつと遅れてくるやつじゃないの!?!」

「ごめんごめん。」

ホンット女心わかってないわ！

「あ、でも待つてくれたってことは、楽しみにしてくれてたってこと? イタツ！」

「そういうのは言わないの！ほんとバカね！あなたは！」

「うう…ごめんなさい…ごめん…」

「あ！そうだった！ごめんごめん！バカじゃない、バカじゃないわよ！だからしっかりなさい！」

なんで私が悪いみたいになってるのよ！おかしくないかしら？

「で？そのフレンチのお店ってどこ？美味しくなかったら許さないわよ？」

「うん！お口に召されると思いますよ？お嬢様。」

「お嬢様いうな！」

なんなのよこいつは。掴みどころがなくて飄々としてて！訳が分からないのよ！

で、レストランに行ったんだけどね。

「こちら、パエリアでございます。」

「キタキタ、これが美味しいんだよ。」

「いや、あの」

「どうしたの？早く食べよ？」

「これはスペイン料理だよ!!!」

拝啓お母さん。

彼はやはりバカすぎるようです。

ちなみに。パエリアはとても美味しかったです。

「なあ、生きてるか？」

「ご飯きちんと食べたか？」

「掃除もきちんとするんだぞ？」

「仕事はどうだ？辛くないか？」

はあ…

息を吸って…

「お前はおかんか！」

でもあの日から少し私は元気になった。

コイツのことは認めないけど！絶対認めないけど！

とりあえず私の生活の質は向上した。

ひっじょーに不本意ながら。

そして私は気づいた。

私の命を救ったのは…

かなり厄介なストーカーもどきだったようです。

## 彼の2度目の恋事情

見ず知らずの女性を助けてから早くも三ヶ月が経った。

俺のことを馬鹿と言いながらも受け入れてくれる彼女のことをだんだん好きになっ  
ている自分にも気づいていた。

性格は全然違うのに、初恋の君とふとした時に重ねてしまうことがある。

二人とも優しいからかな？

なんて考察をしてみるけど馬鹿な俺にはよくわかんねえや。

前もてつきりフレンチだと思って勇気を出して飯に誘ったんだけどな…

まさかパエリアがスペイン料理だったとは…

そういえば初恋の君も「君はほんとに馬鹿だなあ」と言いながら笑ってたっけ…

俺…いや、僕が彼女に告白したら君は怒るだろうか…？

僕の中での初恋の人は永遠に君だから。安心してね？

ここまでの人生で、俺は周りの人に笑われまいと必死になってて。

馬鹿であることを必死に隠してたから。

馬鹿でも笑って許してくれる彼女といるのが心地いいんだ。

でも彼女には相変わらず酷いことばかり言われるんだけど…

嫌われてるのかな？

そうだとしたら嫌だなあ…

もう恋なんてしないと思ってたのに…

起きたら朝だった。

伸びをして時計を見る。

マズイ。完全に寝坊だ。

今日は彼女と映画に行く約束の日なのに！

遅刻する！

俺は朝飯も食べずに身なりだけ整えて家を飛び出した。

なんとか約束の時間には間に合った。

一分前だけど。

「遅いわよ！女を待たせるんじゃないわよ！ほんとに貴方は！」

「はは、ごめんごめん。」

「ごめんで済んだら警察はいらないわよ！もう…」

グー

そのタイミングで俺の腹が鳴った。

すげえ気まずい。

「あんたまさか…」

「ハ、ハハ」

「人に飯食ったか？なんて言うくせに自分は朝ごはん抜いたの？」

「はい…ごめんなさい」

「ハア…軽く食べられるもの買いに行きましょ。映画まで時間もあるし。」

その優しさが大好き。

そんなわけでコンビニでメロンパンをひとつ買って食べた。

「あんた…ごつい体して菓子パンなんて可愛らしいもの食べるのね…」

「ごついからって甘いもの食べないとも限らないんだぜ？」

「分かったから。そんな悲しそうな顔しないでよ…」

「お待たせ。食べ終わったから映画行こっか。」

で、映画館に入ったわけですが。

「あの？」

俺が訊くと彼女はぷいと顔を逸らして「何よ。」という。

ちよつとほつぺ赤くなつてゐる。

「これ、恋愛モノじゃありません？」

「そ、そうよ！何か文句ある？こういうの1人で行つたら寂しいでしょ！別にあなたのことなんてなんとも思つてないけどせつかくなんだから付き合いなさいよ！」

「いや、いいんだけどな。」

やっぱりそうですか。

少し期待した俺が馬鹿でしたか。

分かつててもちよつと悲しいなあ…

## 薄紅色の…

映画が終わった。

割と王道なボーイミーツガールな感じだった。

んだけども。

「ボンツ」

「おーい。あのー？メーデーメーデー」

「ひゃ、ひゃい!？」

「いや、大丈夫？顔真っ赤だけど。体調悪いのか？熱でもあんのか？」

そう言いながら体温を測ろうと額に手を当てようとすると…

「触んじやないわよこのバカ！」

「いってえ！」

「あ…ごめん」

「いや、気にすんなよ。俺も無遠慮だったな。ごめんごめん」

「え、怒らないの？バカって言ったのに。」

「いや、だから俺が悪かっただろ。バツが悪いから何度も言わせんじやねえよ。」  
「あ、うん。」

「あの…すいません、次のお客様がいらっしやいますので退出お願いしてもよろしいですか?」

「ヒヤ、ひゃい!ほら!早く行くよ!」

「いや、君が…」

「うるさい!」

「なんでえ!」

「さつきからひどくね!?流石に怒るよ?」

「うん、はい。ごめんなさい」

「分かればよろしい。」

「よかった…」

ところでさつきから周りの目線が痛いんだけど。  
コーヒー飲んでる人多くね？なんで？

さてと、行くか。そう思つて歩き出した時だった。

「ね、ねえ」

呼び止められた。

「さつきの見て、さ。ちよつといいなつて思ったからさ。別にあんたじゃなくてもいいけどたまたま居たから、ほら。恥ずかしいから早くしなさいよ。」

「はい。分かりました。」

はつきり言つて手が強ばつてます。

何だろ、女の子の手つてこんなに柔らかいんだな。

あと近い近い。

普通にシャンプーの匂いするし！

嫌じゃないけど！寧ろ大歓迎だけど。

この流れで抱きついたら…

あ、吹き飛ばされるな。

金的までありうる。あれは痛すぎるから勘弁していただきたい。

ところで最近思っただけだよ。

この子、案外ウブなの？

あの映画であそこまでゆでダコになってフリーズするとかないと思うんだが。

はあ…なかなか距離が縮まねえなあ…どうしたらいいのかねえ？

この子明らかに脈なしだなあ…

根拠？好きな人を普通ぶん殴ったりしねえだろ。

ところでどこに連れていかれるんだろな。

ちよいちよい手を引っ張られてるから目的地はあるんだと思うんだけど…

とりあえずこれ以上ぶん殴られないことを祈るんだがな。

えつと…あ、飯か。ワクドナルド見えてきたわ。

「あの…?」

「何よ」

「いや、このジュースはなんですか?」

目の前には一つのカップに二つのストローが刺さっているジュースが。  
要するにリア充が使うやつだな。うん

「ほら、映画でやってたじゃない。ああいうの憧れてたのよ。いや…だった?」  
その上目遣いは反則です。

「じゃあせーので飲もうよ。」

「え…えええ…なんで柄にもなくノリノリなの?」

「はーやーく!」

はあ、嬉しかったんだけどね？少し疲れたよ。周りの目も痛いし。そんな感じで余韻に浸ってた時だった。

「キヤーーーー！」

悲鳴が聞こえた。

## ノーマルバッドエンド

## その終末は偶然か必然か

そこには狂ったように笑う男がいた。

泡を吹いていて、何を言ってるかよくわからねえ。

男は包丁を握り直してこっちに突進してきた。

狙いは俺じゃない。彼女だ。

ポカンと立ち尽くしている彼女に、飛び降りる直前の君の寂しそうな顔が重なった。  
今だ。今こそ君のように彼女を守るのだ。

決意を固めた俺は彼女を突き飛ばす。

しかし凶刃に体制を固める余裕はなかった。

「グッー」

包丁がかなりやばい位置に刺さった。

通り魔は驚いたような顔をしている。

「目の前で…2度も…大事な人を死なせてたまるか！」

痛みをこらえ、拳を固め、通り魔の顔面を全力でぶん殴る。

通り魔は吹き飛んでいった。

眩暈がして、俺は倒れた。

彼女が駆け寄ってくる。

あ、これダメなやつだな。

なっさけねえ。せめてこれだけは伝えねえと

「なあ…」

「何？」

「そんなに…泣くな…そうやって…泣かれると、俺も…悲しい。」

「う、うん。」

「どうにもこうにもなんねえな。俺はここまでらしい。目が霞んできやがった。」

「そんな！やだよ！貴方が死んだら！」

「これだけは、言わせてくれ。」

「何？」

「いつからか分からない。俺は君が大好きだった…今日も…楽しかった…ありが…とう」

「何過去形にしてんのよ！これからもいっぱいデートするのよ！それで！それで！教会で式を上げるのよ！私貴方がいなくなったら…どうやって生きていけつていうのよ！」

「え…？それ…つ…て…？」

「私もあんたのことが好きなのよ！なのに…こんなのつて…こんなのつて…」

「あのな、最後のお願いなんだけどな？聞いてくれるか？サラ」

「え、ええ。最後と言わずになんでも言つてちょうだい！」

「俺が死んでも、死ぬな。もし自殺なんかでこつちに来やがったら…その可愛い顔面に…グーパーン…してやるからな…」

「うん…わかった…頑張る…」

くエピソードく

あの通り魔事件から十年がたった。

辛い日は沢山あった。

そんな時に寄り添ってくれた彼と私は結婚した。

そして…

「オギャーオギャー」

「はーい元気な男の子ですよ」

「よかった…」

「名前は君に任せるよ。何がいい？」

「ならペルクスでもいい？」

「いいけど…なんで？」

「ふふ、内緒。」

ねえ、空から見てますか？貴方の名前を持った男の子ですよ。

貴方のような優しく人を守れる男性になりますように…

産まれたばかりの赤ちゃんが、優しく笑ったような気がした。



## デッドエンド

### 彼女の悲劇的な最期

「いや。嫌よ、死なないでよ！ねえ！」

血を流している彼は、もう虫の息だった。

そんな彼が、手を上げて何かを差し出してきた。

「鍵……？」

「俺の、家の鍵だ……クローゼットの下に……プレゼントがある。俺のエゴかもしれねえけどさ。受け取って……ほし……い」

彼が、二度と動くことはなかった。

私は彼の家へと駆け出した。

家の中に入った途端彼の香りが押し寄せてきて、彼が出迎えてくれるような気がして涙が溢れた。

彼に言われた通りクローゼットの下を探ると、小さな箱と封筒に入った手紙が出てき

た。

封筒を開けて、手紙を読んでみた。

拝啓 愛しいサラへ

こういう事は直接言うべきなんだろうけどさ、俺バカだからうまく伝えられる自信が無いから手紙にするな。

あの日、飛び降りようとしてる君を見た時、直観的に思ったんだ。「助けなきゃ」って。

だから飛び降りた君の手を捕めた時、本当に安心した。

で、ホント見えず知らずの人のなのに何故かすげえ心配になったんだ。

それから連絡先を聞いて、定期的に生存確認するようになってさ。

君の声を聞く度になんてか心があったかくなったんだ。

まるであの子といた時みたい。

あ、他の子の話ししちゃダメなんだっけ？忘れてたわ。ごめんよ

それでさ、パエリア食べに行つた時に気づいたんだ。

あ、俺は君の事が好きなんだなって。

同時に時折悲しそうな顔をする君を支えたくなった。

だからさ。

もし良かったら、なんだけどさ。

君の一生を俺に支えさせてくれねえかな？なんて。

思っちゃまうわけよ。

一緒に渡した箱に指輪が入ってるからさ。もしOKなら明日それを付けて初めて出会った場所に来て欲しい。

あなたを愛するバカより

所々誤字のある手紙を読み終えて、そこにあつた箱を開けたらダイヤモンドの指輪が入ってた。

底には値札のテープが貼られたままだった。

そのテープに、アイツのバカさと…温もりを感じて。

かろうじて堪えてた涙は溢れ出した。

私は子供のように、声を上げて泣きじやくつた。

ふと目が覚めた。

あれ？嫌な夢だったな。

そうだ、あのバカが死ぬわけがないじゃない。

早く手紙の場所に行かなきゃ。

…来ない。

いつになったらくるのよ！アイツは！

いつもいつも遅れてきて！ごめんの一言で済ませやがって！

今日こそ文句の一つでも…文句を…

その時、自分の指にはまっている指輪が目に入った。

アレ？アレは夢じゃなかったの？



くエピソードく

「今日、山中で女性の遺体が見つかった。身元がわかるものは身につけてなかったが、まだ新しいと見られる指輪が指にはまっていた。女性は自らの全身を激しく掻きむしったと見られ、特に眼球などは残っておらず、爪には赤黒い血がこびり付いていた。死因は大動脈を爪で掻き切ったものと見られる。自殺の可能性が高いが一応事件のセンも洗って置いてくれ。」

彼女が再び希望を抱くまで

悲愴と、苦悶と、煩悶と

彼がこの世を去ってから、私の世界から色が抜け落ちた。

数年経つても喪失感が消えない。

なにもやる気がしなくて、最低限外に出て、バイトをやって食いつないでいるが、無気力な私に集中力はなくて、すぐにミスをしてたちまちクビにされてしまう。

一人で家においても、何もすることがなくて、まるで彼と出会う前に逆戻りしたかのよう。

それでも死のうとは思わなかった。

彼の最期のお節介を無碍にする気はしなかったから。

そんな時だった。

「辛そうな顔してるね。何かあったの？」

相手はバイトの男の先輩だった。

「何でもないです。お疲れ様でした。」

この内心を見透かされたような気がして、私は逃げるようにしてバイト先から帰った。

関わって欲しくない。そう思っていたのに。

次の日も。

「ねえ、大丈夫?」

その次の日も。

「辛いなら相談してよ。」

その次の日も。

「なんでそんなに寂しそうななの?」

その一言に思わずブチギレてしまった。

「もう関わらないでください! 私は一人で大丈夫なんです!」

先輩は悲しそうな顔をしながら言った。

「なら、どうして泣いてるの？」

え…？

「君もそんな表情するんだね。ちよつと安心したよ」

泣いてる…？私が？

「これ、僕の連絡先だから。辛かったらいつでも連絡してよ。」

そう言つて先輩は去つていった。

その背中はやけに大きく見えた。

帰宅した私はすぐにベッドに飛び込んだ。

手には先輩の連絡先が書いてあるメモ。

私はそのメモとにらめっこしていた。

登録…すべき？

でも連絡するのも癪だし…

グサツ！

「ペルクス…」

サ…ラ…

「行かないですよ！」

じゃあ、な。

「嫌だ！」

自殺なんか、すんじゃねえぞ

「私も一緒に連れてってよ！」

目が覚めた。またあの日の夢を見ていたらしい。

何度見てもあの夢は慣れない。

寝汗でびっしょりになったパジャマに不快感を覚え、着替える。

「ペルクス……」

無意識に彼の名前を呟く。

涙が溢れた。

人の想いは移りゆく。

それが通説でしかないらしいというのはこの数年で分かりきっていた。

何年経っても彼への想いは一向に薄れる様子がない。

むしろ強くなっていつているような気もする。

私は彼を渴望している事を強く自覚していた。

そんなことを考えていたからか、彼を喪つてからの私の行動を冷静に省みることが出来た。

ふと気づいた。

「あのバカが私が悲しむのを見て喜ぶ訳がないじゃない…」

どうしてこんなことにもっと早く気づかなかつたのだろう。

どうやら私はアイツよりもバカらしい。

## そして、裏切り

次の日から私はバイトを真面目にするようになった。

集中するようになったら、今まで手こずっていた仕事もすぐに片付けられるようになった。

気にかけてくれていた先輩は「なんだか明るくなったね。安心したよ」と言ってくれた。

そうやって頑張ってる日々はなんだかキラキラ輝いていて、楽しかった。

優しい先輩は、いつもわからないことがあつたら教えてくれて、出来ないことは何回聞いても怒らないで笑顔で見本を見せてくれる。

他の仲間だって、よく話しかけてくれる。

前なんか一緒にご飯を食べに行つた。

久しぶりの賑やかな食事でも楽しかった。

それでもたまに不安になる。

この楽しい日々がいつか失われてしまふんじゃないかって。あとだんだんペルクスとの思い出が薄れていつてるような気がして寂しくもなる。

でもこうも思う。

もし失われたとしても、また手に入ればいいさつて。

それにあんなバカなこと、忘れられるわけがないつて。

そんなある日のこと。

先輩に食事に誘われた。

彼はとても優しくくて、ユーモアもあつて、細かい気配りも利いて、一緒に居て楽しかった。

それから一週間くらい経つたある日。

先輩がバイト先で、バイト先の男に殴られた。

その知らせを聞いて、心配になった私は家を飛び出して、バイト先に向かった。

そこには困ったように笑う先輩、先輩の頬に茶色い消毒液を塗る店長、そして怒りを堪えている様相の男。

私は男をキツと睨みつけてから先輩に「大丈夫ですか？」と尋ねた。

先輩は「大丈夫だよ。怪我也そんなに酷くないし：イテテ」と言った。

店長も「ちよつと顔が腫れたただだよ。冷やしたらすぐ治るからもう帰りなさい」と言ってきた。

彼の怪我は十分痛々しく見えた。

私は男にふつふつと怒りがこみ上げ、男の頬を同じように殴りたくなっていたが、流石に店長の前なので堪えて、男をもう一度睨みつけてから、私は納得出来ないまま店を出て自宅へ帰った。

それからまた何日かたって、私は先輩と入れ替わりのシフトだった。

先輩と少しだけでも話したくてバイト先に早めに行った。

自転車を漕いで、胸を弾ませながら、息を切らしてバイト先へと走った。

店番をしていた先輩ではないバイト仲間に「おはようございます」と挨拶をして、店員の控え室に向かう。

そうしたら先輩と、別の人の会話が聞こえてきた。

「ほんつと、チヨロかったなああの女。こつちがちよつと優しくしてやったらコロツと落ちやがんの。」

「でもどうすんだ？付きまとわれたりしたら面倒だろ？」

先輩は普段とは全然違う邪気を孕んだ声で言った。

「んなモン一発やって捨てるに決まってるだろ？」

## 誰もが悪く、醜く、そして哀れな話

先輩の母は、心因性の病にかかっていた。

機嫌がいい時はとてもハイテンションでニコニコしているけれど、ふとしたことで機嫌が悪くなり、まだ幼かった先輩にひどい暴力を振るった。

父は妻の心の病を治そうと必死に努力したが、それが叶わないと知ると先輩を置いて逃げるように家を出ていった。

彼は暴力を振るわれながら自問自答した。

今こうして殴られているのは僕が悪いからなのだろうか。

いいや違う。

では誰が悪いのか。

母が悪いのだ、と。

もし彼の母を擁護するなら、彼の母は幼少期から家を出るまでの間、母（先輩の祖母）の再婚相手から性的な虐待を受け続けていた。

そして多感な心は歪み、壊れてしまったのである。

しかしそれを先輩が知ることはついぞなかった。

先輩が保育園でお泊まりの行事をした時、保育園の保母さんが先輩の体に不自然なあざを見つけ、密かに保健所に通報した。

そして虐待があったことが証明され、先輩は養子として一般的な家庭に引き取られた。

それでも彼は母が憎かった。

もはや親子の情など消え失せ、母へは憎悪以外に何の感情もなかった。

里親は優しくしてくれたし、表面上は優等生のように装っていたので彼は特に問題視されないまま成長していった。

それでも母へ出たら至るところにいる女性が母に見えてくる。

そして自分を罵倒してくる。

そんな幻覚に責め苛まれたもう彼は限界であった。

彼は身の回りの女性に復讐を始めた。

彼にとって幸運で、多くの女性にとっては不幸なのは、彼の容姿が普通以上には整っていたこと。

おかげで彼は、その凶悪な本性を見せなければ、優しくて包容力のあるイケメンに見えた。

彼はターゲットを決め、優しくして恋をさせ、そのタイミングで裏切った。

その瞬間の相手の苦しそうな、悲しそうな顔がとても快感だった。

歪んだ嗜好ではあるが、復讐の大義名分を得たそれは彼の中では正義であった。

彼はたくさんの女性を陥れてきた。

サラは、今回たまたまターゲットになったただだった。

彼の思惑通り、サラは彼に恋をした。

バイト先には、歪んだ胸のうちを共有できる仲間が数人いて、彼らといつもサラを嘲笑っていた。

ただし、今回彼が想定していなかったことがある。

それは、真実を知って、怒り、サラを守ろうと動く男性ロキがいたことである。

普段から、彼にとって厄介なそのような存在がいけない女性をターゲットにしていたつもりであったが、今回彼はあまりにもサラが陥れやすかったせいで油断したようである。

サラは真実を未だに知らない

## 喪失と、獲得と、幸福な最期

扉の奥の先輩は、悪魔のようにカラカラと嗤いながら、話し続けた。

彼は言った。

「しかもアイツもアイツだよなく急に殴ってくるとかおつかねーの。」

「お前おつかねえとかそんなタマじゃねえだろうがwww」

「違いねえwwwとはいえバレた時はどうしようかと思っただぜ。バカで助かったよ、お陰でこっちは被害者ヅラしてりやいってもんだ」

私は耳を疑った。

え？あの人はずべてを知ってた…？

誤解をしていたのは私の方だった！？

私は耐えきれなくなって、バイト先の店の外に出ようと走り出した。

店のドアを開けた時、誰かにぶつかった。

その誰かは私の事をしつかり受け止めてくれた。

顔を上げると、そこに居たのは、今まで誤解していた相手だった。

涙が溢れ出して止まらなくなった。

「ごめんね……ごめんね……」

私はそれしか言えなかった。

彼は困ったように肩をすくめながら、ハンカチを差し出してきた。

私が涙を拭いて、落ち着いたのを見ると彼は、「そんな顔してどうした？綺麗な顔が台無しだろ？」って言った。

私に真偽を見分ける力が無いのは分かりきっていたが、その言葉が本物であることは不思議とわかった。

私は控え室の前で聞いたこと、先輩の本性、今まで彼のことを誤解していたことを言って、謝った。

彼は少し苦笑しながら、「そんな事かよ」と言った。

そして彼は言葉を続ける。

「あのさ、なんか弱みにつけ込むみたいでやなんだけども。俺バカだからこういうのど  
うやって伝えたらわかんねえけどいうわ。ずっと前から君の事が好きだった。俺と付  
き合ってくれ！」

え…？

バカ…？

一見普通のセリフ。

それでも私は混乱した。

だけど!!

「うん…だって私のためにそこまでしてくれたんだもん、断れないよ…」

やった！なんて言いながら飛び跳ねる姿はやっぱりあのバカと変わらなくて。

私は無意識に「おかえり…」と呟いていた。

すると彼は。

「ただいま！」と答えた。

…ええ？

…どういうこと？

思わず固まってしまった私の手を引いて彼は笑顔で駆け出す。

そのまま控え室の扉を開け放って言った。

「おい、この子は貰うぞ？」

先輩は怒り狂うかと思いきや私の顔を見て「ねえ、その人でいいの？僕のこと諦めてその人で手を打つの？可哀想」と言った。

彼は言った。

「俺からしてみりやお前なんか騙されたこの子とそんな事しか出来ねえお前の方が可哀想なんだよ！」

先輩は、「なら勝手にしろ。どうせほかにも女はいる。」そう言って控え室から出ていった。

次の日から先輩はバイト先から消えた。

くエピソード2く

あれから幸せな日々は何十年も続いて、私は子宝にも恵まれて、最高の人生を送った。神様は最初の三十年あまりの不幸を補ってあまりある幸せを私に与えた。

あの時彼がどういう意味でおかえりと言ったのかはついぞ分からない。

だけど私は、敢えて信じよう。

あのバカは帰ってきて今度こそ私を幸せにしてくれたのだと

目が霞んでいる。

子供たちは私にもっと生きられると言ったがその言葉が嘘であることくらいすぐに

わかる。

これでも自分の死期位は把握しているつもりだ。

私が寝ているベッドの周りは、娘息子と孫達が囲んでいる。

本当に…幸せな人生だった…

ロキ…ペルクス…今そちらに逝きます…

子供たち、孫達…

さよ…うな…ら…